



---

ぼくの大好きな  
『赤頭巾ちゃん気をつけて』

---

蛭子 たまき

---

こんな男の子になりたい。

はじめてこの本を読んだ高校時代、心の底から熱烈に願ったことを覚えている。

16歳だった私は2次元と3次元、テレビの内と外、国内外、老若問わず、無節操に惚れまくる女の子だったけれど、こと薫くんに関してはこんな男の子に「あこがれる」「好き」ではなく「なりたい」と切望したのだ。

80年代の終わりに高校生活を送った者にとっても、庄司薫（※この本は作家と主人公の名前がいっしょです。で、私が指しているのは主人公の薫）くんのいた'69年の東京は遠かった。

「学生運動」「ノンポリ」なんて言葉ははるか地中深くに埋まり、意識して掘り出さねば目にすることもない化石だった。

それでも。

薫くんの饒舌な思考の中に登場する「東大紛争」や「全学連」や「（家に一台しかない）黒電話」や「ゴーゴー喫茶」などの化石達はページの上でいきいきと跳ねまわり、ダンクシュートを叩き込むがごとく真正面から私に突き刺さった。目から入った言葉は、ありとあらゆる自意識と格闘する薫くんをはじめ、恥を忘れて矜持を失くした時代の虚しさにいち早く傷ついてしまう硬派な友達の小林くんや、「舌かんで死んじゃいたいわ」なんて可憐な山の手言葉で怒る幼馴染み由美ちゃんなど、「自分とは生きている時代が違うキャラクター達」への不思議な親近感と共に、私の奥へ奥へと突き進み、やがて、ストーンと落ちたのだ。

そう、文字通り、腑に落ちた。

「この本の中には、そう遠くない先、社会や世の中と呼ばれるモノにいやってほど踏んづけられるはずの私に必要なモノがつまっているんだろう。だから、新しいんだ。だから、古い時代の小説だけどこんなにもリアルなんだ」って。

世の中全体の風潮や世間の空気みたいなものに惑わされず、何事もまずは自分で考え—たとえそれで「いい子ちゃん」「つまないヤツ」と思われたとしても腐ったりせず—知性とユーモアでもって健やかな光を求めつづける強さを、薫くんは私に伝えてくれた。

みんなが右向け右で自棄になって自分だけ楽に生きることを考えはじめた「昭和元禄阿波踊り」の最中に、フリーセックスもせず、ゲバ棒も持たず、よりによって生爪のはがれた足の親指をねらいすましたように踏んづけてきた見知らぬ小さな女の子を恨みも怒りもせず、困っている彼女のためにすてきな本まで選んであげられる……しなやかなやさしさを、薫くんは私に示してくれた。

大きな落とし穴にはまった時に教養と芸術がどれだけ直接的な力になるか、薫くんは私に味わわせてくれた。

これからどんな人生を歩こうとも、大人になりたいなら「やさしさ」という言葉とイコールで結べるような「強さ」が大事だよって、この本は私に教えてくれた。

薫くんは男の子で、本の中には由美ちゃんに代表される「女の子」を守りたいって気持ちなんかも描かれていたりするけれど、女子高生だった私は薫くんの中に性別を超えた1人の人間としての誠実な姿を見たのだと思う。

だからこそ、薫くん「になりたい」と切望したのだろう。

この本に出会って、私は放っておけば簡単に弱く狭く不実になれてしまう自分をギリギリのところで踏みとどまらせる太い芯を得たのだ。

時が過ぎ、私は大学に行き、会社に入り、案の定いろいろ踏んづけられて、へこんだりやさぐれたりした。

世の中の男性の大半が薫くんのように強くはないことも身に染みた。

自意識という嵐に振り回されて、へとへとになったりもした。

それでもどうにか結婚をして、会社をやめてフリーになって、子どもを産んで、そして、今も仕事をつづけている。

はじめて読んだ時はすこしお兄さんだった薫くんの年はとっくに追い抜いた。

彗星の速さでどんどん過去になっていく日々を眺めるにつけ、今はまだ小さい子どもが薫くんの年になるのもそう遠くない未来だろうと実感している。

外堀だけ見れば、私はもうすっかり大人だ。

ただ、本丸は怪しい。16歳の私には申し訳ないことだけれど、経験と年の功だけでは乗り越えられない感情の嵐は今でもちょいちょいやってきていたりする。

大人になるって難しいのだ。「強い」大人になるのは、特に。

だから。

私は今でもこの「青春小説」と言われる本を読み返す。

白状しちゃうと、何度読み返したかわからなくなるくらい読み返していたりする。

羅針盤のようにこの本をひらき、自分の立ち位置と目標地点を確認するのだ。

薫くんの若い、とても若い、新芽のにおいを放つ思考をまぶしく見つめながら、自分の中にも同じものが残っているかどうかを確かめる。

自分の芯が腐ったり折れたりしていないか確かめる。

「こんな男の子(=大人)」になれているかどうか自問し、必要ならば反省し、可能であれば有頂天になり、軌道を修正し、そしてまた本をとじて私は私の人生を歩く。

「赤頭巾ちゃん気をつけて」と呪文のように唱えながら。